名所物見の旅　其の四拾壱 - 那須連峰山麓の温泉を訪ねて ②

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

歩き始めた時はちらちらと雪が舞う程度であった空模様も、高度を上げるにしたがって横殴りの猛吹雪となり、頂上に近づいてきたらもう目も開けていられないほどで、顔面が凍りついてきた。日本アルプス三千メートル峰と比べればたいしたことはないだろうとたかをくくって登ってきたが、厳冬期の山は甘くはない。視界ゼロに加え、寒さで身体が硬直し、ピッケルを握る手にもあまり力が入らない。これ以上進むのは危険と判断して那須茶臼岳（1915m）登頂は断念し、下山することにする。

秋に甲子（かし）温泉を訪ねた後、次回は那須北温泉を再訪しようと計画し、どうせなら厳冬の茶臼岳から三本槍岳まで片付けて、尾根伝いに北温泉に下山しようと思っていたのだが、天候悪化でやむなくリタイア。冬季休業中のロープウェイ駅の脇を通って大丸温泉まで一気に駆け下った。すぐにでも温泉に入りたくなったが、本日の目的地は北温泉であるから、ここはぐっと我慢して一路北温泉に向かう

那須茶臼岳周辺には数多くの温泉が点在し、魅力溢れるいで湯が観光客をいざなっている。また登山口の温泉はハイカーの入下山の際の入浴や宿を提供する登山基地としての役割を果たし、登山の足場として重宝されている。那須十一湯と呼ばれる温泉の代表格は那須湯本温泉で、デラックスホテルから自炊宿まで約八十軒が軒を連ね、共同湯の鹿ノ湯は味わい深い木造の建物で、中に入るとたくさんの観光客や地元の人達で常に賑わいを見せている。那須十一湯にはそのほか大丸温泉、弁天温泉、高雄温泉、北温泉、新那須温泉、八幡温泉、旭温泉、柳沢温泉、三斗小屋温泉、板室温泉がある。そして那須山系広域に目を移すと、甲子温泉、新甲子温泉、二岐温泉、岩瀬湯本温泉、湯野上温泉、塩原温泉郷が湯煙を上げている。これらのいで湯の多くが素朴な雰囲気を残す湯治客中心の宿で、中には以前紹介した徒歩二時間の三斗小屋温泉のように、訪れるには体力も必要という温泉もある。

今回の目的地・北温泉は私にとって三十年ぶりとなるので、どのように変わったか興味あるところであったが、吹雪の中に姿を現した北温泉は予想に反し、まったくといっていいほど以前のままだった。宿は江戸安政期、明治、昭和の建物が混在し、建て増しを何回も繰り返しているので、内部をつなぐ廊下はまるで迷路のようだ。ロビーには大きな火鉢や古い掛け時計が飾られ、居間には掘り炬燵や古い家具が置かれてレトロな雰囲気が漂う。北温泉を訪れた誰もが、まるで百年前にタイムスリップしたような気分になるのである。

宿の前には「泳ぎ湯」とか「千人湯」と呼ばれる北温泉名物の巨大な露天風呂があるが、猛吹雪で誰も入っていなかった。大きな天狗の面が掛けられた素朴な造りの内湯は、湯樋から熱い湯がドウドウト流れ溢れている。昔は確か天狗の面は湯船の横にひとつだけだったと記憶しているが、湯船正面奥と入り口の壁にも天狗の面が掛けてある。なんだか天狗に見張られながら風呂に入っているような気分だ。湯滝（打たせ湯）などは内装が新しくなっていて、以前のコンクリートの湯船の鄙びた温泉のイメージは薄らいで、より洗練された情緒ある木造に変わっている。あちこちに風呂があるので、全部の湯に入るにはたっぷり時間がかかるが、それだけ温泉を堪能できるということである。

久々に訪れた北温泉は湯量豊富の湯が惜しげもなく流れ、情緒ある建物や雰囲気など、とても素晴らしい宿であることを再認識した。温泉通と言われる人達には勿論のこと、日本人のみならず、前回紹介したハンガリー人らのように、外国人にとっても人気が高く、一度は泊まってみたい宿というのも頷けるのであった。

雪道の向こうに姿を現した北温泉。北温泉は江戸時代から昭和期までの建物が混在しており、内部は複雑な造りになっている。

北温泉「天狗の湯」。湯船には熱い湯が大量に溢れている。ランプに照らされた薄暗い風呂場には昔ながらの湯治場の雰囲気が漂っている。

北温泉名物の大露天風呂はプールのように広く、「泳ぎの湯」という名が付いている。さすがにこの猛吹雪では入浴する気にならなかった。